

序

文字が活字になると何かが大きく変わります。活字になるとは、コピー用紙にワープロ文字がプリントアウトされることなく、『政治学研究』のような刊行物に言葉が印刷されることを意味します。それでは一体何が変わるのでしょうか。まず、読者が増えます。三田祭論文や卒業論文を読んでもくれる人の数はせいぜい数十人でしょう。もちろん、それでもゼミの指導教員や同僚から有益なコメントを得られるわけだから、ゼミに所属して卒業論文などを執筆することは非常に有意義です。ですが、活字になればより多くの人間の目に触れることになり、まさに自分の研究成果が世に問われることになるのです。しかも、面識のない研究者や他大学の先生にも読んでもらえるかもしれません。というのも、ちゃんとした印刷物になっていて、しかも抜刷り（雑誌の自分の論文だけが冊子体になっているもの）にしかるべき謹呈の言葉が記されているのであれば、一気に文章のステータスが上がるからです。

もっとも、活字になっているからといって論文の質が保証されるわけではありません。活字ならとりあえずは読んでもらえる可能性が高まるということに過ぎません。これは一段階上のスターティング・ポイントに達するという意味で望ましいことではありますが、それはあくまでもスターティング・ポイントであり、そこに到達することで一定のリスクが生じることも忘れてはなりません。というのも、論文の内容がよくなければ逆効果になってしまうからです。駄作が活字になった場合、読者は失望や憤りを覚え、最悪の場合、著者の能力だけでなく雑誌そのものの権威までを疑われることになります。「なんだこの論文、よく活字になったな」から始まって、「こんな論文が載るような雑誌は読むに値しないな」といったふうに。

したがって、活字化には責任が伴い、おのずと緊張感が高まります。私もいまだに自分の言葉が活字になるときには緊張します。しかし、同時にこの緊張感は喜びをもたらします。とくに活字になったものを手にするとき、それまでの苦勞が報われ、ナチュラル・ハイに（一時的にせよ）浸れます。このしびれるような感覚を『政治学研究』に寄稿した学生は味わったことでしょう。自分の言葉に責任を感じながら、そして不安のなかで試行錯誤を繰り返しながら論文を書くことは素晴らしいことだと私は思います。できるだけ多くの学生に経験してほしいと願っています。

最後に、本号に論文を載せた学生の勇氣と努力を讃えたいと思います。そして本号に収録されている論文が広く読まれ、多くの読者を啓発すると同時に、政治学科の学生に刺激を与え、彼らの「活字」へのチャレンジ精神を喚起するよう心より祈っています。

2020年 1 月

法学部教授・法学部学習指導
堤林 剣